



さて、今月は何を書くかだが、まあ、バングラ帰りにだからその方面で書くことはけっこうあるのだが、そう浮かれてもいられない。なにしろ腰巻ひとつで動いている人たちの中から急に大寒波の真っ只中に飛び込んできたのだから体調が良いわけがない。ましていつものことなのだが外国へ出て行って腹を壊すことはめったにないのに、日本に帰ってくると結構落ち着かなくなってきた、なんだか日本の水が合わないみたいだとよく思う。そんな状態で遅らせ続けていた仕事に向かうのはけっこうつらいものだ。

でもまあ、その辺で自爆男が爆発して何人も死んで新聞がにぎわったり、バスターミナルのバスの下から3、5kgの时限爆弾が見つかったりする、そこいらじゅう銃を構えた兵隊や警官ばかりの国よりは、まあ、多少あほな国でも安心できるのは良い。第一ダツカは震度4くらいの地震でも来たらまず全市が間違いなく壊滅するだろう。ニュースをにぎわしている建築士なんてここに来たら最優良建築士になるのは間違いない。わずかな鉄筋しか入っていない申し訳程度の柱と床板だけで梁なんてものはないのがほとんどだというのが建築ラッシュであちこちによきによき生えてくるビル郡の工事を見てよくわかる。後はレンガで壁を作って、天才的なモルタルのコテ仕上げで、近代的なビルの一丁あがりだ。彼らは「地震はないんだ。」と言うがそんなはずはないのだ。そんな建物のひとつであるホテルにいと、地震が来るなら屋間外に出ているときにきてほしいものだとしみじみ思う。

向こうで外務省の発表する海外危険情報は、市場に行くな、官公庁に近づくな、群衆に近づくな、というものだし、ゼネストのときも危ないところはどこかと聞いたら「道の上」と言われた。しかしそれらはすべて不可能なのだ。異教徒の群衆の中をかきわけるように行かねばならないし、しごとの相手先も官公庁だし、その中で泊まっているのだから逃げようがないのだ。

でも村の中で私にも出来ることは一つある。それは余分なものを持たず、ただ、ゆっくり歩くことだ。穏やかに立ち居振る舞い穏やかに歩く。それだけなのだが、村の人々の中で、早い動きは目に止まる。ゆっくりとした歩みは村の生活に溶け込み、そこに敵意や危害を加える心が生まれてこない。第一ゆっくり近づけば話せる距離になるまでゆっくり相手を観察でき、相手もこちらをじっくりと見極める時間が取れる。いろいろなことを考え推測し、十分見切った後で接するのだから両方もゆとりを持って話すことが出来る。そういう出会いはたくさんの人との良い出会いを生みだす。そう思っている。そんな中での不意な事故はありえるが、それはやむを得ない。

もっとも私がゆっくり歩くのはそのほとんどが歩測をしているのだが、しまいにはそれが私のリズムになってしまう。たまに偉い人たちと車で村に乗りつけ、時間を気にしながら早足で歩き回る時など、そんな自分たちの集団がいかに周囲から浮き上がっているかをしみじみと感じる。日本の時間をそこに持ち込んではいけけないのだ。あわただしく進入し、過ぎ去っていったものになってはいけけないのだ。人々の暮らしの中にそっと踏み込み、人々の心の中に静かに、穏やかに入り込み、情けない気弱な笑顔の一つも見せてゆっくりと立ち去って行きたいのだ。たいしたことはできなと思うが、ゆっくりと歩むものでありたい。そういう人が次から次へと現れて消えていけば大きな力になりえる。それは、命というもののあらわし方としたら、結構うまいやり方なんではあるまいか。そんなことを考えている。あわてることはないのだ。ゆっくりと、ゆくりと、そしてゆっくりと。

<http://www.interq.or.jp/japan/gnomes/gnomes1>

TEL/FAX03-5600-0195 高村 哲 GnomesJpn@aol.com